



(埋め立て地から恋路島を望む)

「天の魚 (いと)」大阪公演

ご支援のお願い

2019・9 天の魚を関西で観よう企画

天の魚 大阪公演によせて～公演主旨～

10年ほど前のことだ。

私は両親の新保健手帳申請の付き添いで、新大阪の雑居ビルを借りて行われた熊本県の検診に行った。

原因不明の体調不良が水俣病由来かもしれないとわかり、職を失って経済的に急におぼつかなくなった私は、自分と両親の医療費だけでも何とかならないかと思ひ、嫌がるふたりを説きふせ半ば無理やりにここへ連れて来てしまったのだ。

並んで順番を待っている人たちは、となりあう人とふるさとの言葉で話す。

まずはどこの者だという話になる。茂道だ、御所浦だ、鶴木山だ…ふだんは水俣のミの字も口に出したくないし、そもそも出す機会の無い人たちが、やわらかにふるさとの言葉で話す。

つぎに話すのは、ここに来るのにどれだけの勇気が必要だったかという話だ。

「父さんが『お前だけでも検診に行け』って言うんです。『自分はチツソに世話になっとるけん、そげなもんよう受け取れん、だからお前だけでも』ってね」。

「私はずっと頭のしびれよるです。田舎の妹と一緒に申請しようち話したら、『姉ちゃん、まだ手帳ばもつとらんのか？ちゃんと申請せんば（しなければ）』と言うんです。お互いこんなことを改めて話すことなかけん。向こうにはちゃんと情報がいつとつとですねぇ」。

そこに来ているのは皆けっこうなお年の人たちで、きっと、かつての私の両親と同じように若い頃に働きに出て関西に住み続けている人たちだ。

不知火海周辺出身の人たちが、たくさんここで働き、今も暮らしている。

幼いころ、両親は私達姉妹を連れて毎年帰省していた。親しくしている大叔母の家に行くと、そこには色が白くてか細いお兄ちゃんがいつもふとんの上において私達を迎えてくれた。お兄ちゃんはしゃべらないけどにっこりして、周りの空気はやさしくて、居心地がよかった。

それは私が2、3歳のころで、ふとんに寝かされていたお兄ちゃんの記憶があるという事自体が不思議なことである。そこには大人にはわからない子ども同士のあたたかいつながりがきっとあったのだろう。

壱太郎少年の話を聞いて私はお兄ちゃんを思い出す。お兄ちゃんと壱太郎少年、そして私。みんな同じ病気だ。胎児性水俣病。

あの頃の不知火海周辺には、色んな家にその家の“壱太郎少年”がいて“江津野老”がいたに違いない。しかし実際には、彼らはあんなふうに水俣病事件の周辺で起こったたくさんの苦難について誰かに語る事はない。私の祖父や祖母たちも、大叔母もそうだった。いろいろな理不尽を経験し、たくさん語りたいたいこともあつただろうに、そういうことをみんな墓場にもって行ってしまった。

お兄ちゃんが話したかったこと、大叔母や大叔父が話したかったことを、『天の魚』という演劇は聞かせてくれるのかもしれない……。そう思うととても聞きたいような、聞くのが怖い気がする。しかし私も立派に中年になり、そんなことも言っていられないような気がしてきた。

この声を埋もれさせてはいけない。

天の魚は1964年初秋……。ちょうど、日本が東京オリンピックに浮かれている頃のお話だ。その後には1970年大阪万博。半世紀後にやってきた再びのお祭り騒ぎは、私をじりじりと焦らせる。やれ2020東京オリンピックだ、その後はまたまた大阪で万博だ……。豊かになるのは誰なのか？ 私たちは、同じ道をたどり、同じ場所にいきついて、本当に幸せになれるのだろうか？

あの待合室に並んでいた大勢の人たちは、久々のふるさとの空気を懐かしく思い、同時に複雑な思いを抱えて、新大阪駅からまたそれぞれの今生きる場所に帰っていった。

水俣から遠く離れたこの関西の地で、皆さんのまわりにも、あの日あの場所に並んでいた人たち、その人たちにつながる人たちが暮らしている。私たちのかわりに今も色褪せず“あこのころ”を語りかける江津野老と空太郎少年の物語を、今この時代のこの場所で、耳を傾けてくれる人たちと、ともに聞き、ともに考えたい。

私達はどこから来たのか、そして、どこに行こうとしているのかを。

2019年10月
『天の魚を大阪で観よう企画』呼びかけ人代表
おした ようこ（水俣病被害者）

（呼びかけ人）

おした ようこ
最首 悟
久保田 好生
白木 喜一郎
竹村 洋介
中田 千絵
今関 惇



公演概要

石牟礼道子『苦海浄土』を原作に制作された「天の魚」。それはかつて、水俣病事件の理不尽を世に訴えるために俳優・砂田明氏が1993年に他界するまで全国で556回上演された一人芝居です。近年その砂田明氏に演劇を学び、当時の上演活動を支えてきた俳優・川島宏知氏が「天の魚」を復活させ、再び全国各地で地道な公演活動を続けています。本公演は、大阪では約30年ぶりの上演となります。

水俣病に侵された人たちは『水俣病患者』『水俣病未認定患者』『水俣病被害者』である前に、ひとりのひとであり、またそれぞれが家族の一員でありました。

物語の主人公“江津野老”と、彼の孫“壱太郎少年”は、つましく病と共に生きる祖父と孫として、私たちに連綿とつながるいのちの重みを語りかけます。

公演に合わせ、「水俣病事件と関西のつながり」への理解をより深めていただくために、重度複合障害をもつ娘さんの誕生をきっかけに水俣病事件や障害者運動との関わりを重ねてきた最首悟さんと、関西在住の“水俣病被害者”であるおしたようこさんとの対談の場を設けます。

会場にいる方とともに水俣病事件について何かを思い、考え、感じる場としていきたい。おひとりでも多くの方のご参加をお待ちしています。



記

日時：2019年11月17日(日)

昼の部：14:00～ **対談**：16:00～ **夜の部**：18:00～ ※開場は各回30分前を予定
※各回入れ替え。特別対談は昼の部ご観覧の方も夜の部ご観覧の方も入場いただけます。

場所：大阪府立男女共同参画・青少年センター(ドーンセンター)

〒540-0008 大阪府中央区大手前1丁目3番49号 1階・パフォーマンススペース (入口すぐ奥)

料金：前売券：2000円。当日券：2500円。事情割：1000円。

一人芝居「天の魚」大阪公演・ご協力のお願い

実は水俣とは縁の深い大阪という土地で、ぜひ多くの方々に一人芝居「天の魚」をご覧頂きたいと考えております。

私たちとともに、一人芝居「天の魚」大阪公演をつくって下さる仲間を探しています。ご意見・ご質問などもお気軽にお寄せください。

賛同金/カンパを頂いた方、前売券委託販売、当日の運営など、天の魚大阪公演開催に関わって下さった方のお名前を、HPと当日配布資料でご紹介したいと思っています。

同封の申し込み用紙、メール等にてお知らせください。同内容を郵便振替用紙にご記入いただいても結構です。

1、前売券について

○前売券は当日券に比べてお得な価格になっております。ご来場いただける方はなるべく前売券をお求めください。

○前売券を一定数預かり、販売に協力して頂ける個人、団体を探しています。

2、一人芝居「天の魚」大阪公演を広めてください。

○個人や団体等の SNS、ブログ、ホームページ、メーリングリスト、ミニコミなどでのシェア、広報をお願いします。

チラシデータはホームページでダウンロードできます → <https://ten-no-iwo.1o0.jp/>

○データでなく、紙のチラシを設置・配布して頂ける方は「天の魚」関西企画までご連絡ください。必要部数をお送りします。

3、賛同金を集めます

○できるだけ多くの方にご覧いただくため料金を抑え、また、経済困窮その他の事情のある方にも足を運んでいただきやすいよう「事情割」を導入しております。そのためチケット収入だけでは、運営費用を賄えきれないのが現状です。

○チケット収入に加え、賛同金を集めております。是非ともご協力をお願いします。

☆賛同金

1口 1000 円 ※5口ごとにチケット一枚贈呈。

☆カンパ

任意の額。※前売券購入の際に少し足していただくなど、大歓迎です！

☆郵便振替口座 郵便振替口座 00900-1-283233 問学研究会

☆クレジットカード決済可能です。ご希望の方はメールでお知らせください。

kansai.tennoiwo@gmail.com

4、準備・当日の運営ボランティアを募集します

○公演実施のためにボランティアスタッフを必要としています。(受付、設営と撤収、会場整理など)。ぜひ、皆様のお力をお貸してください。

ご協力頂ける事項について、同封の賛同・協力申込書にご記入の上、メール、FAXでお送りください。



「天の魚」関西企画 連絡先

代表 おした ようこ (尾下葉子)

事務局 問学研究会 (今関 惇)

ホームページ <https://ten-no-iwo.1o0.jp/>

kansai.tennoiwo@gmail.com

電話 070-5046-0549 (今関)

FAX 072-752-4801 (尾下)

〒554-8799 大阪市此花区春日北 2-1-9 此花郵便局留 今関惇宛